二次元ぷち文庫
退魔教師
希彩(きさや)
1.5
那柚の退魔行
試し読み版
天戸祐輝
表紙イラスト／ブリキ
2D PETIT POCKET NOVELS

当ファイルは、モバイル二次元ドリームにて配信された
『退魔教師希彩１・５　那柚の退魔行　前編』
『退魔教師希彩１・５　那柚の退魔行　後編』
に基づいて作成しております。

※本作は二次元ドリームノベルズ『退魔教師希彩　羞虐の学園』（キルタイムコミュニケーション・刊）とともにお読みいただきますと、よりお楽しみいただけます。

※本作品の全部あるいは一部を無断で複製・転載・配信・送信したり、ホームページ上に転載することを禁止します。本作品の内容を無断で改変、改ざん等行うことも禁止します。また、有償・無償にかかわらず本作品を第三者に譲渡することはできません。

天戸祐輝

表紙イラスト／ブリキ

二次元ぷち文庫

登場人物紹介

Characters

紫羽希彩（しはねきさや）

退魔師の家系に生まれ、巫女として強力な霊力を持つ美女。霊力が強いために幼い頃から魔物に襲われており、それらに対しては冷徹。以前、魔物に操られた生徒たちに辱められた過去がある。その際に衰えた霊力を取り戻すため、現在再修行の真っ最中。

湖納那柚（このうなゆ）

人より強い霊力を有していることに気づき、希彩に教えられながら修行中。水泳部のエース的な存在であり、ミス栖候（すこう）学園にもなった人気のある美少女。美人でスタイルのいい希彩に憧れている。かつて自分を陵辱した魔物を強く憎んでいる

「は～いっ。これで女子のスピード測定おしま～～～いっ」
男女問わない、幾多の水泳部員の会話が聞こえる室内プールに、顧問である二十代前半の女教師、紫羽希彩の声が響き渡った。
「前回より、みんなすごくタイムが短くなっているわ。これなら、今度のリレー種目は優勝を狙えるわよっ」
スピード測定で疲れ、室内プールのいたるところで休憩している部員全員に聞こえるように、口元に手を当てて大きな声で叫ぶ。
「やったっ。今度こそ、リレーで優勝しなきゃ」
「もう、那柚の足を引っ張らないからね」
「そんなことないよ。この間のリレーだって、わたし抜きで準優勝してたじゃない」
顧問の声を聞いた女子部員たちが、青い髪をショートカットにした十代後半の少女、水泳部のエースでもある湖納那柚のもとに集まり、楽しげな表情で話し始める。
少しタレ目がちで大きな黒瞳を輝かせる那柚は、この年頃の少女でしか持ち得ない幼さを輪郭に残した美貌を持ち、ミス栖候学園にも選ばれた美少女だ。
適度な高さの鼻頭を貌の中央で飾り、形のいいピンク色の唇で作られた笑みは、みんなを和ませる魅力を持っている。
部活で引き締まった肢体は細く、柔らかく膨らんだCカップの肉果実は、紺の競泳用水

着の胸元を蠱惑的に膨らませて男子の注目を集めてしまうほどだ。
くびれた腰から下は魅惑的な丸みに膨らみ、ハイレグの競泳用水着に桃の形が浮き上がっている。
水着から露わになっている肌は健康的な色で光を反射させ。しなやかな筋肉のついた長い四肢が、女子たちの中で一際際立ってしまう。
「やっぱ、湖納って可愛いよな……」
「ああ、それにあの身体は……」
希彩のそばに居た男子二人が、ポツリと呟く。
彼らの目は間違いなく那柚に吸い付き、水着の胸元や大事な部分を包むハイレグの布を見ては、興奮で生唾を飲み込んでいる。
（はぁ〜〜〜……。年頃の男子だからしょうがないけど……）
年頃の男子が女子の身体に興味を持つのは仕方ない。
仕方のないことなのだが、欲情を隠さないで見られるのは同性として見過ごせない。
幼い頃から発育がよく、自分も興味と欲情の視線に晒されて育ってきた希彩は、溜め息を零しながら那柚を見ている男子に近づく。
「そんなエッチな目で女子を見ていたらダメよ」
「ち、違うってっ⁉」

「お、俺たちはただ、ただ湖納の泳ぎがすごいっておも、思ってただけだってっ」
少し怒った雰囲気を見せながらも優しくかけた言葉に、二人の男子があからさまに慌てた。
「そんなエッチな目で女子を見ているなら、退部させちゃうから」
一般的な女性よりも少しだけ背が高くて細い肢体で彼らの前に立ち、くびれた腰を曲げながら、青い瞳を上目遣いにして見つめる。
意図せず、自然としてしまった仕種。
しかし、希彩は男女問わず、この私立栖候学園の誰もが憧れる存在だ。
勝気な雰囲気ながらも優しさを感じさせる青い瞳は、目尻がわずかに吊り上がって全ての人を魅了するように輝き。眉間からスッと通った鼻筋は、完璧な計算で作られたように高い鼻頭を貌の中央に飾っている。
優しげな笑みを浮べる唇は、ピンクルージュで染められて美しくも魅惑的な形を際立たせ、無意識のうちに男を惹き付けてしまうほどだ。
大人のシャープなラインの中に少女の面影を残す小顔の輪郭は、絵画の中の女神を思わせるほど整い。長く艶やかな亜麻色の髪は、その毛先を女子と同じ競泳水着を着たお尻にまで届かせている。
しかも、彼女は教師の中で一番若く、学園生と間違えてしまうほど若々しい。

「た、退部は、退部は許してくださいよ。希彩先生」
「そうだよ、退部したら、俺たち……」
女教師の冗談を本気にした二人の男子が、慌てて弁解する。が、その言葉が途中で止まった。
彼らの目が、今度は希彩の肢体に吸い付いている。
水着を着た美女教師の肢体は、凹凸が激しいにも拘らず、完璧なプロポーションを保っているのだ。
特に胸は、極大のスイカが二つ並んでいるのかと思うほど大きく、規格品の水着には収まりきらなくて、胸元と脇口から潰れたベル型の柔房がはみ出している。
美峰乳からくびれた腰へは滑らかなラインで流れ、水着のウエストに包まれたくびれが艶めかしく際立っていた。
水着のハイレグ部に包まれた大事な部分は、きわどいラインで淫部を隠しているものの、布地にふっくらとした女肉と女溝を陰影し。細腰から急激な丸さで膨らんだ大きなお尻にいたっては、ナイロン布が肌に喰い込んで半分ほど露出し、割れ目が浮き出している。
「どうし……きゃっ」
急に黙った二人の男子に、育ちのよさを感じさせる細い指先で触れながら尋ねた希彩は、彼らの視線に気づき慌てて胸と下半身を腕で覆い隠した。

「あ～～～～っ。あんたたち、また希彩先生をエロ目で見てたわねっ」
女教師の悲鳴に気づいた那柚が、少女らしく少し高い声で近づいてくる。
「まったく男子はエロエロで仕方ないんだからっ。さあ、早く並んでよ。男女混合リレーの練習するんだからっ」
困っている美女教師の姿に、ミス栖候が並んでいる列を指差して助けてくれた。
希彩と那柚は、教師と生徒という関係だけではなく、もう一つ重要な関係がある。
今から一ヶ月ほど前のことだが、この学園は前学園長の欲望で人外どもに狙われ、強力な霊力を有している元退魔巫女の希彩と、生まれつき霊力が強かった那柚は陵辱されてしまったのだ。
その事件以降、那柚は自身を護るため。そして、自分と同じ目に遭うであろう女の子を護るために、希彩に退魔術を教わり修行している。
師弟関係。それが、今の彼女たちのもう一つの関係だった。
「たくっ。そんなに怒らなくてもいいじゃないかよ。俺たち、希彩先生の裸なら、もう何回も……」
「――――っ!?」
男子たちの言葉に、希彩の顔色が変わる。
魔に襲われた陵辱事件は、元退魔巫女によって一時的には解決した。

だが、この学園にはまだ魔氣が渦巻き、本当の意味で事件は解決してはいない。
それに一ヶ月前の事件で、希彩は水泳部の男子たちに輪姦されてしまったうえ、幾多の生徒や教師と乱交した映像まで撮られていた。
口に出すことも禁止されたその事実。この場にいる男子全員と関係を持ってしまった記憶に、ピンクルージュの唇を噛み締める。
「あんたたち、それ以上言ったら、本当に許さないわよっ！」
「ご、ごめん」
怒りの色を滲ませた那柚の姿に、男子があやまりながらリレーの列に加わっていく。
「あっ、そうだ希彩せんせ～い。女子の人数が一人足らないんですけど～～～っ」
怒った男子に続くように、二チームに分かれた片方の最後尾、アンカーの位置についた那柚が、大きな声で話しかけてきた。
事件後、被害に遭った女子を多く入部させたために、男女比が二対三になっている。つまり、現在の水泳部は、圧倒的に女子が多い。
「ん～～～、しょうがないわね。こっちのアンカーには私がつくわ」
そう言いながら、那柚とは別のチームの最後尾に希彩が並ぶ。
「おお、希彩先生と湖納の勝負じゃんか」
「かならず勝とうね、那柚」

学園で一番人気の美女教師と、ミス栖候の勝負。その対決に、両チームの士気が上がる。
「それではいくわよ。位置について、用意、スタートっ！」
バシャ――――ンッ！
両チームの先頭泳者が、同時にプールに飛び込んだ。

バシャバシャバシャッ！
混合リレー後半。二人の女子がクロールで泳ぎながら、希彩と那柚が待つ飛び込み台へと向かっていた。
彼女たちのスピードはほぼ同じ。だが、リレーをする間に人一人分の差が開き、希彩のいるチームが優勢の状態だ。
バシャバシャバシャ……パチンッ！　バシャッ！
先に泳いでいた女子の手がプールの壁に触れ、希彩が飛び込む。数秒遅れて、もう一つの水音がバシャッと室内プールに鳴り響いた。
（水が胸に……）
決して泳ぎが不得意なわけではない。ないのだが、大きな胸が邪魔すぎる。
クロールで水を掻く度にぶつかるだけではなく、水が胸に絡まるようにぶつかり、思うようにスピードが上がらない。

（本当に邪魔たわ。この胸っ）
自分の大きすぎる胸に、贅沢な悩みを感じてしまう。
希彩は十代の頃からスタイルがよく、胸も大きかった。
同級生の女子からは胸の相談をされ、男子からは好奇の目で見られていたほどだ。
しかし、それでも、この前まではGカップだった。
あの魔に陵辱された事件以来、犯された影響か、それとも女性ホルモンの分泌かは知らないが、一回り大きくなってしまい今ではHカップになっている。
それも、重力を感じさせないベル型の形は崩れることなく、美しい形のまま柔肌を張っているのだ。
お陰で、街を歩いても男女問わず視線を集めてしまい、動くには邪魔で仕方がない。
（胸を小さくする方法って、ないのかしら？）
泳ぎながら、胸に感じる水流に苛立つ。
後ろから聞こえる泳ぎの音は徐々に近づき、開いていた差が縮まっているのが分かる。
（やっぱり、那柚ちゃんは速いわね）
壁を叩いてターンをし、さらに近くなっている音に驚く。
タイムは知っていたが、一緒に泳いでみると、それ以上の速さに感じる。
（あと少しで……）

もう希彩も必死だ。負けたくないという意思が働き、息継ぎの回数を減らして泳ぐ。
周りからの応援する声に応え水を掻き、見えた壁に向かって手を伸ばした瞬間。
パチンッ、パチンッ……。
ほぼ同時に壁を叩く音が聞こえた。
「ぷはっ！　はぁはぁはぁはぁはぁ……」
亜麻色の髪から水を滴らせて美貌を上げると、同じように青い髪から水を滴らせて呼吸を繰り返す那柚が隣にいる。
全力の泳ぎで疲れながらも顔を見合わせ、自分たちでは結果が分からず見上げると、何人もの部員が集まってリレーの結果を見定めていた。
「「やったっ。希彩先生の勝ちだ～～～～っ！」」
「「くそ～～～っ。湖納が負けた～～～～っ」」
両チームの男女が同時に声を上げ、勝負の結果を教えてくれる。
「あ～あ～……。追い付けなかった……」
「でも、すごく速かったわ……」
顔を見合わせた那柚と話す。
リレーの結果は希彩のチームの勝利だが、これが一対一の勝負なら完全に負けていた。
「ゴメンね、みんな」

（この気配はっ！　やっぱり魔に取り憑かれた人が居るっ）
学園に近づくにつれ、はっきりと魔氣を感じられるようになっていく。
（それに、この霊氣は……）
美貌がさらに曇る。
十人ほどの気配に混じり、よく知っている霊氣も感じられる。
戦う決意を決め、愛用のショルダーバッグから退魔の鞭を取り出して校門に辿りついた瞬間。青い瞳に映る情景に怒りが込み上げてきた。
「ンぁッ、あッ、はぁうぅッ！　はぁはぁ……もう許し……はふッ……」
深夜の校庭に素行の悪い生徒が集まり、その不良たちのヘッドである男子が、一人の女生徒を陵辱していたのだ。
少し離れた場所にいるにもかかわらず、希彩の耳にはジュチャジュチャという淫らな挿入音と、悲しい喘ぎ声が聞こえてくる。
「那柚ちゃん……っ」
ギシッと奥歯が鳴るなり、青い瞳からいつもの優しさが消えていく。
緑のサマーベストと白い半袖ブラウスを破りはだけさせられ、水色のプリーツミニスカートを腰まで捲り上げられている少女は、間違いなく那柚だ。
しかも、ピンクの下着をずらされた彼女は、不良ヘッドである倉坂哲のペニスで貫かれ、

えっちシーン試し読み ここからスタート!

露わにされた丸い肉果実まで揉まれている。
「へへ、メインディッシュまで来やがったぜ」
希彩に気がついた哲が、那柚の肢体を突き上げながら欲情した目で見つめてきた。
「ンあッ、うッ、はぁはぁ……希彩……せんせ……い……ふぅあんンッ！」
哲に続き、青い髪を頬に張り付かせたミス栖候と、彼女の肢体を視辱していた不良たちが一斉に目を向けてくる。
「許さないっ！」
大事な教え子を再び犯された怒りが全身を包み、しなやかな筋肉が戦闘態勢を整えていく。
目の前には十人ほどの不良たち。
いつもの希彩なら、どんなに素行の悪い生徒でも優しく注意する程度だが、今はそんなことは関係ない。
二度とこんなことをできないように叩き伏せる。それしか頭になかった。
「反省させてあげるわっ！」
その言葉と同時に地面を蹴り、最高速で不良たちへと突っ込む。
「な、何だあの化け物みたいな速さはっ!?」
初めて退魔巫女の希彩を見た不良たちが、怯えた表情を見せる。

怒りに瞳を吊り上げ、亜麻色の長髪をマントのように広げた彼女は、彼らから見れば自分たちの命を刈り取る化け物にしか見えない。
「穢れ者の力を借りた人間に、化け物呼ばわりされるなんてねっ！」
不本意だ。が、それでも、容赦をするつもりはない。
退魔の鞭を振り上げた希彩は、そのまま那柚の肢体を犯し続ける哲を薙ぎ、痛みとともに引き離そうと狙いを定めた。
「俺の女と気持ちいいことしてんだ、邪魔しねぇでくれよ、先生」
余裕を見せる哲が突然ナイフを取り出し、鈍く光る刃を美少女の首筋に押し当てた。
「俺に何かしたら、那柚の命はないぜ」
「――っ⁉」
あと一歩近づければ鞭が届く距離。しかし、人質を取られている状況では、これ以上動くことはできない。
ミス栖候学園にも輝いた美少女も、自分の危機が分かったのだろう。喘ぎながらも、黒い瞳を見開いて肢体を硬直させた。
「希彩先生、その鞭と鞄を早く捨てろよ。じゃないと……」
「くっ……」
首筋に当てた刃に力を込めて目を血走らせた哲が、命令口調で話してくる。

理性を失いかけている彼なら、本当にやりかねない状況だ。
ピンクルージュの唇を噛み締めた希彩は、那柚の命を護るために、退魔の鞭と退魔札が入った鞄を放り投げた。
「希彩先生が抵抗したら、刺しちまっていいからな」
そう口にした哲が秘孔からペニスを引き抜き、手下の不良に那柚を預けて近寄ってくる。
幾多の不良に身体を押さえつけられた美少女は、汗にまみれた胸や淫部、全身の肌を嬲られながら、ぽっかりと開いた秘孔から濃い白濁液を溢れ返した。
「那柚ちゃん……」
犯されグッタリとした彼女の姿に、心が痛む。
「へへ、那柚もよかったけど、やっぱり希彩先生のマ〇コじゃないと、このチンポが満足しないぜぇ」
魔憑きで異形化して大きくなったペニスを見せる彼の姿に、希彩は胸の中から湧き起こる不安を抑えられなかった。

※

「那柚ちゃんは無事なんでしょうね」
人質を取られ、抵抗できなくされた希彩は那柚と離れ離れにされ、学園でも一番端にある学園祭専用の倉庫に閉じ込められていた。

通常時には何も置かれていないその倉庫は、数個の荷物があるだけで、かなり広い空間が確保されている。
「あたりまえじゃんか。希彩先生が抵抗しないで、俺たちを気持ちよくさせてくれれば、また無事に会わせてやんよ」
「……っ」
悔しさしか感じない。
目の前には不良ヘッドである哲と、彼の手下である不良が三人立ち、欲情した視線で身体を見つめてくる。
今、体術のみで彼らを倒したとしても、この倉庫の外には別の二人が見張っている。
単純に考えて希彩の近くには六人の敵がいる。となると、残りの不良たちは、みんな那柚の見張りについているはずだ。
ここで下手な行動をすれば、どこかに捕まっている那柚の身に危険が生じる。
今の自分にできることは、彼らの欲望に応え、再び那柚と出会えるチャンスを待って、肉体を使った浄化術を施すしかない。
「へへ、それじゃ、自分でおっぱいを見せてくれよ」
(眺めて辱めようとするなんて、卑劣ね)
心で毒づきながら淡いピンクのブレザージャケットのボタンを外し、続けて白いノース

リーブブラウスのボタンも外して前を開く。
「「おおっ」」
服の前を開き、上半身の白い肌と、ピンクフリルつきの白いハーフカップブラを見た不良たちから、一斉に驚嘆の声が上がる。
退魔巫女として鍛えられた彼女の肢体は、スレンダーながらも出るところは出ている。胸はスイカが二つ並んでいるほど大きく、腰はキュッとくびれていて細い。タイトミニに包まれているお尻は、細腰から急激に膨らんで布地を持ち上げているほどだ。
生徒に負けない若々しさでムチムチした太腿は、黒いニーストッキングと同色のガーターベルトで彩られ、色気と艶めかしさを振りまいている。
誰もが憧れるそんな美女教師が、自ら肌を晒し下着に包まれた胸を見せているのだ。
欲情した不良男子でなくとも、普通の男でも、彼女に性的な魅力を感じてしまう。
「これで満足？」
ブラに包まれたHカップの美峰乳を突き出すように見せながら、哲に青い瞳を向ける。
「そんなんで満足するはずねぇじゃんか。ちゃんと全部見せろよっ」
ブチッ！
「――っ⁉」
ブラを掴まれ、無理やり引き千切られた衝撃に唇を噛み締めた。

下着を失った柔房は、その重さを物語るように揺れながら不良たちの視線に貫かれ、重力を感じさせないベル型の肉果実と、小さな乳輪の中に佇む鴇色の頂を見られてしまう。
「相変わらずスゲェおっぱいだぜ、へへ……」
「んぅう……」
面長の貌で淫らに笑った哲が、興奮を抑えられなくなったように両胸に触れ、そのまま柔らかい乳肌に指を喰い込ませてきた。
胸を掴まれるような息苦しさに呻いてしまうが、同時に肉果実全体を包むくすぐったい乳悦感に自然と吐息が洩れ、ムズムズと痒くなっていく乳芽が尖り勃つ。
「もう感じてんのかよ、希彩先生っ。乳首が勃ってきてるぜっ」
「いい加減なことを言わないで。この程度で感じるはずないでしょう……っ」
哲の言葉を否定しようとするが、指の間に乳芽を挟まれて転がされた刺激に、思わず艶めかしい声を洩らしそうになってしまう。
「感じてないんだったら、このエロい乳首は何でこんなに勃ってんだよっ」
「くあっ……やめ……潰れて……くううっ」
乳芽をより強く挟まれて転がされる刺激に、否定する声がどんどん弱まっていく。
（ダメ……感じてはダメっ！　意識を別のことに集中させて……）
ちゅつっ、ちゅるるるる……。

「ひぃあっ⁉　ひくぅううっ……」
哲が乳芽をしゃぶってきた強烈なくすぐったさを、唇を噛み締めてこらえる。
敏感な頂から弱い電流を流されたような乳悦の痺れに、大きな肉果実全体がジンジンと疼き、限界まで尖ってしまった乳芽が激しい痒みに包み込まれていく。
（こんな……こんなに簡単に……）
忘れたくても忘れられない、陵辱によって覚え込まされた快楽。
乳悦によってその喜びを再び思い出してしまった肢体は、しっとりと汗ばんで熱くなり、下腹部が切なく疼き始めてしまう。
「たまんねぇえぜ先生。興奮で乳首を噛み切っちまいそうだぜぇ、かぷっ」
「きゃひっ、くひぃいいいいいっっっ！」
乳芽を噛まれ、強く歯を立てられた痛みに耐えられず、悲鳴を奏であげてしまった。
肉体の一部を食べられるような痛みに恐怖を覚えてしまうものの、同時に乳芽から襲ってきた鋭い痛悦感に、肉体の内から湧き起こる喜びを抑えることができない。
（ど、どうしてこんなのが……）
肉体の感覚に戸惑う。
前の事件の時も、ひどいことをされればされるほど快楽を感じてしまうことがあった。
再び感じる背徳的な悦感。その気持ちよさにショーツの中が女熱に包まれ、ふっくらと

した淫部がムズムズと疼いていく。
「いい声出しやがって、そんなに俺にさわられるのがいいのかよ」
乳首を唾液まみれにさせた哲が、胸の谷間に顔を埋めながら話してきた言葉に、答え返すことができない。
今、口を開いたら、おそらく言葉よりも先に喘ぎ声を奏でてしまう。
彼にしゃぶりつかれた乳芽は、痛悦感のあとの痺れでジンジンと痒くなってしまい、力ずくで揉まれている二つの肉果実が、もっと強い刺激を求めて切なく乳肌を張っている。
未だにさわられてない淫部は、女熱で蒸されて汗を掻いてしまい、レースの布が肌に張り付いて気持ち悪さすら感じる。
「ずいぶん切なそうな顔じゃねぇか希彩先生。こっちもさわって欲しいんじゃねぇの？」
「や、やめなさい。そこは……っ⁉」
胸から離れた哲がしゃがみ、黒いタイトミニを捲り上げて、ピンクフリルのついたセクシーショーツをみんなの目の前に晒した。
大事な部分を包む下着を見られる恥ずかしさ。それと同時に、薄い布越しに熱くなった部分を、ひんやりとした外気に晒される心地よさを感じてしまう。
（な、何を感じているの私っ、空気に触れるだけで気持ちいいなんて……）
恥ずかしさで感じてしまう肉体に、頭を振って否定する。

だが、胸と下着に集まる視線に全身の肌がザワザワと騒ぎ、締め付ける秘孔の力で抑えられなくなった愛液が、白い鋭角な布に染み込み始めてしまった。
「見られた途端濡らしてんじゃねぇよ。やっぱ希彩先生は淫乱女だぜっ！」
「ち、違……私はそんな女じゃないわ。これは、あなたが……」
「自分の淫乱を俺の所為にしないでくれよ、先生」
「──っ⁉」
ショーツに顔を近づけ、二つの脚穴に指を引っ掛けてきた彼の姿に言葉が止まる。
下着が掴まれて布を中央に寄せられたために、薄い亜麻色の草むらが外気に晒され、股布が淫唇に挟み込まれた。
「や、やめ……きゃふぅぅぅぅううううううう──っ！　っ！」
哲が何をしようとしているのか気づき、震える声でやめさせようとした直後。彼の手で引き上げられたショーツが淫部に、そして大きなお尻に喰い込んできた。
「あひっ、やめ……やめてっ！　痛い……痛いぃいいっ！」
亜麻色の長髪を振り乱し、大きな胸を上下に揺らしながら乱暴な行為を拒む。
まるで、荒縄で大事な部分を締め上げられているような痛みだ。
すでに下着の役目を果たしていない布は、充血し始めた左右の淫唇を彼らの目に晒してしまい、膨らんだ淫核が布で隠れているだけだ。

「どうだよ希彩先生。淫乱女ならこういうのも気持ちいいんだろっ！」
「き、気持ちよくなんて……な、ない……ひきっ、ひぃうう……っ」
口では否定してみるものの、ショーツが強く淫部に喰い込み、薄紅色の粘膜や秘孔を擦ってくる痛くすぐったさに、全身の肌にまでムズムズとした刺激が駆け巡ってくる。
特に布に包まれたまま転がされる淫核は、白ピンクの女芽を剥き出されて強烈な疼きと痒みに襲われ、意識が飛んでしまいそうな悦痺れで頭の中を直撃してきた。
「くはっ、もうダメ……立って……立っていられなく……」
淫部から全身を駆け巡る痛悦に全身から力が抜け、崩れるように倒れかけた希彩を、周りで見ていた三人の不良が支えてくる。
「エロすぎだってぇ、希彩先生」
「うほっ、スゲェ柔らけぇぜ、このおっぱいっ」
「んっ、はふっ……やめ、さわらないで……ひゃんんっ」
哲によって淫部を嬲られ続ける肢体に、身体を支える不良たちまで手を這わせてきた。
大きな胸は二人がかりでめちゃくちゃに揉み潰され、首筋にはナメクジのような舌が這わされてゾクゾクとした刺激を与えてくる。
数人がかりの愛撫に拒もうとした手は、それぞれ手首を握られて拘束され、彼らの興奮を教えられるようにズボンの股間に押し付けられた。

（か、硬いっ⁉　もうこんなになっているなんて……）
ズボン越しに伝わってくるペニスの硬さと熱さに、心臓がドクンと高鳴ってしまう。
彼らの股間からは人外の氣が感じられ、魔憑きとなって異形化しているのがすぐに分かる。だが、以前の事件でそのペニスで貫かれた時の快楽が、膣を再び疼かせてくる。
（ち、違うっ。こんなモノ、私は欲しくなんて……っ⁉）
「あくぁあああぁあああああっ！　あひっ！　やめ……ひぃきっ、ひぃうううぅうううぅうううううううう――――――――――――っ！　っ！　っ！」
心に芽生えかけた肉欲を拒んでいる希彩に気づいた哲が、さらに下着を淫部に喰い込ませてきた。
大事な部分を虐げられる背徳的な悦感に、秘孔からは大量の愛液が溢れてショーツを濡らし、洩らしたように両脚まで伝って黒いニーストッキングに染み込んでいく。
「すげぇっ！　すげぇ濡れ方だぜっ、まるでおしっこを洩らしているみたいだっ！」
「くぅあううっ！　ひぎっ……くぅんんんんんんっ！」
ブチッ！
痛みによって与えられる被虐的な淫部の快楽と、上半身を嬲る不良たちの手で軽い絶頂に昇りかけた瞬間。倉庫に布の千切れる音が響き、大事な部分から痛悦感が消えた。
「ちっ、切れちまった」

ブチブチッ！

「くはっ、んっ……はぁはぁはぁ……」

股布が千切れたショーツを眺めた哲が、つまらなそうにウエスト部まで引き千切り、大事な部分を隠す布を床に落とした。

スカートが捲られたまま隠せない淫部を、彼らの視線とともに外気が撫で上げ、背筋をくすぐられるような刺激が精神を蝕んでくる。

「そろそろブチ込んで欲しいんじゃねぇの？　希彩先生」

「そ、そんなことあるわけ……っ⁉」

拒む言葉すら許さないとばかりに、哲の手が淫部に這わされ、秘孔に指を挿入して膣内を擦りあげてきた。しかも、彼の親指は執拗に包皮から剥き出して膨らんだ女芽を転がし、強烈なムズ痒さで頭の中を直撃してくる。

（こ、これ以上されたら……）

胸を六つの手で揉みしだかれ、淫部をさわられ膣内を擦られる刺激に、もう肉体が快楽に抗うことができない。

哲の指が秘孔に潜って膣壁を擦ってくる度に、大量の愛液がコプコプと溢れて内腿筋の浮き出した太腿を伝い、黒いニーストッキングの足元まで濡らしていく。

呼吸は自分でも淫らだと感じるほど濡れた色を混じらせ、熱くて硬い肉槍を求める身体

が、子宮がキュンキュンと収縮させ始めた。
「もう我慢できないんだろ希彩先生。淫乱な女らしく、自分からおねだりでもしてみなよ」
「だ。誰がそんなこと……」
「できないんだったら、那柚にでもしてもらうぜ」
「……っ」
今も学園のどこかに捕われている彼女のことを口にされてしまえば、もう拒むことなんてできない。
「じゃあ、まず俺からしてもらうぜぇ。自分から入れてくれよ、へへ」
欲望を叶える瞬間に愉悦の笑みを作った哲が、ズボンのベルトを緩めながら手近にあった椅子に腰をかけ、完全勃起した魔憑きの肉槍を見せてきた。
赤子の脚を思わせるほど長くて太い異形のペニス。しかも、表面に浮き出た血管が瘤のようになっているその肉槍に、希彩は唇を噛み締める。
（ま、また、あんなのを……）
異質な巨根を再び膣内に受け入れる。
その屈辱に心が締め付けられるような思いを感じながらも、大きな胸を揉んでいた三人の不良から離れ、椅子に座った哲の股間に跨がっていく。
「ちゃんと言ってくれよ先生。誰の何が欲しいのかをよぉ」

「くっ……く、倉坂くんの……お、大きなペニスをわた、私の中に入れさせて……」
屈辱の言葉に涙が滲む。
「前の時はもっとエロい言い方だったけどよ、いいぜ希彩先生。入れさせてやんよ」
興奮した彼が腰を動かし、コツンと秘孔に切っ先を押し付けてきた。
（また、またこれで犯される……またこんな穢らわしいモノで……）
クジュ……ジュプジュプジュプ……。
「ンはぁっ、あふ……ンぁあぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁッッッ！」
秘孔を淫らに広げて亀頭を飲み込んだ瞬間。久々に感じた膣内の拡張感に両脚から抜け、一気に太い魔肉槍の全てを胎内に受け入れてしまった。
硬い肉幹に膣壁と膣襞を絡める悦痒みと、胎内を灼かれてしまうような焦燥感。そして、太い亀頭に子宮口を突き上げられる浮遊感に全身が痺れ、思わず哲の首に腕を絡めて抱き、今までこらえていた嬌声を奏でてしまう。
「いきなり根元まで挿れるなんて、がっついてんじゃねぇよ淫乱っ」
「くはッ、つ、強いッ……ンぅうッ」
ジュプッ、ジュプッ、ジュプッ、ジュプッ！
膣内の締め付けに我慢できなかった哲が腰を動かし、対面座位でペニスを受け入れた肢体を突き上げてきた。

浮き出た血管瘤で歪な形の肉幹が秘孔を捲り、肢体が上下に突き動かされる度に膣内から悦痺れが生まれ、肉体中をムズムズとした痒みが駆け巡っていく。
倉庫には淫らな挿入音と濡れた喘ぎが木霊し、肉交によって熱くなった肌から大量の発情汗が吹き出してしまった。
「テツさん。俺たちもう我慢できねぇっスよ」
美女教師とヘッドの肉交に興奮した三人の不良がズボンを引き下ろし、魔憑きとなったペニスの切っ先を肢体に向けてくる。
「へへ、いいぜ。おまえたちも加われよ」
「んはっ、んッ……そ、そんな……ひうッ!?」
ジュリュッ、ジュリュジュリュジュリュウウゥゥゥッ！
「くはッ、くひぃぃぃぃぃぃぃぃぃぃぃぃッ！」
哲の許しを貰った不良の一人が大きなお尻を掴み、小さな尻孔を一気に貫いてきた。
薄い壁を通して前後の孔を貫かれた肢体には、感電したような痺れが包み込み、天井を見上げた青い瞳から屈辱と喜びの混じった涙が零れてしまう。
（ぶ、ぶつかって……私の中でペニスがぶつかってる……）
哲と不良が腰を動かす度に、薄い肉壁越しにペニスがぶつかっているのが分かる。
尻孔のは直径三、四センチで長さ十五、六センチ程度。だが、哲の太い肉槍で膣内を埋

め尽くされている所為で、腸内がきつくしまってしまい、それ以上の大きさに感じる。
二孔を貫かれる度に感じる痺れは、希彩の頭の中を白濁させて肉交を求めさせ、自ら肢体を上下に動かし始めてしまった。
「あふッ、あッ、んふぅうッ……い、いい……私……また感じて……ひゃうッ！」
求め始めた身体がもういうことを聞かない。
膣壁と膣襞は蠕動しながら魔肉槍を扱き、尻孔は腸壁をさらに締め付けてペニスを擦りあげてしまう。
「うへっ、ＤＶＤで見たとおり、エロい顔だぜ先生。俺たちのは手で扱いてくれよ」
「あッ、くんん……て、手で……」
左右から近寄ってきた二人の異形化したペニスをそれぞれ握り、切っ先を左右の尻たぶに押し当てて扱く。
「は、早くイッて……これ以上されたら私……わたし……」
頭の中が淫欲に染まり、肉交をやめられなくなる。
自分を抑えられなくなる前に彼らを絶頂させようとした希彩は、自らの意思で肢体を上下に動かし、膣と腸、そして両手でペニスを激しく扱いて彼らに快楽を与えた。
「へへ、そんなに飢えていたなんて知らなかったぜ。だったら、本気でヤッてやんよっ！」
「ほ、本気って……あうッ⁉　はひッ、あくッ、ひふぅぅぅうッ！」

希彩の態度に気をよくした哲が、揺れていた両胸を強く揉んで乳芽に歯を立ててきた。腰はさらに動きを速めて秘孔を貫き、膣内の襞と壁を擦り捲りながら、子宮口に大きな亀頭を叩きつけてくる。

「くはッ、ンぁああッ！　壊れ……壊れちゃうッ！　お腹の中がおかしくなっちゃうッ！」

膣内を激しくピストンし、子宮口を突き上げてくる魔肉槍の刺激に、希彩の精神がとうとう耐えきれなくなってしまった。

女にとって一番大事な部分へ繋がる入り口を、熱く硬い亀頭で叩かれる度に感電したような女痺れが子宮を収縮させ、意識を分断させるように頭の中を混乱させてくる。

快楽に抗えなくなった肉体は激しく上下に揺れ動き、哲に揉みしゃぶられる大きな肉果実には、他の不良たちの手まで加わって美しいベル形を淫らに歪められた。

「スゲェっ、スゲェぜ希彩先生。俺もうイッちまいそうだぜっ！」

「ンはっッ、ひんッ、い……早くイッて……もう終わらせてぇぇぇッ！」

快楽に完全に流されてしまう前に陵辱を終わらせようと、必死になって肢体を上下に動かし、膣と腸を強く締め付けて肢体を貫くペニスに襞と壁を絡みつかせる。

両手は握った二本を激しく扱きながら切っ先をお尻に擦り付けて快楽を与え、全てのペニスからプシュプシュと先液が吹き出し始めた。

「はふッ……こッ、こんなに熱いのが……身体に……私……私もう……もう……ッ！」

この続きは製品版をご購入の上、
お楽しみください。

編集・発行
株式会社キルタイムコミュニケーション
〒104-0041　東京都中央区新富1-3-7ヨドコウビル
TEL03-3555-3431（販売）／FAX03-3551-1208

※本作品の全部あるいは一部を無断で複製・転載・配信・送信したり、ホームページ上に転載することを禁止します。本作品の内容を無断で改変、改さん等行うことも禁止します。また、有償・無償にかかわらず本作品を第三者に譲渡することはできません。
ⓒKILL TIME COMMUNICATION　Printed in Japan

http://ktcom.jp/